

★あなたの人生を変える一冊★

『夏への扉』

ロバート・A・ハインライン／著・福島 正実／訳
(早川書房)



物語は、有能なエンジニアのダンが親友に裏切られ、仕事も恋人も失い、一か八かの冷凍睡眠で未来へ行くとこから始まります。未来でダンは、それまでの人間関係を清算し、新たな生活を始めます。しかし、ある時自分の覚えている過去と、未来で記録として

残っている自身の情報に差異があることに気づきます。何者かに人生を乗っ取られたかのような不気味さすら感じる状況で、ダンは一縷^{いちる}の望みをかけて、ある行動にでるのです。

過去・現在・未来を交錯させながら、ダンがどん底から自身の状況を一変させる展開が見事で、読者の私も、未来への希望に胸が踊りました。緻密に作りこまれた世界観とストーリー構成で、主人公と一体になって物語の世界を生きることができる、小説の魅力際立つ作品です。(奥村幸子)

『図書館戦争』

有川 浩／著（メディアワークス）



この本の舞台は、公序良俗を乱し、人権を侵害する表現を取り締まるための超過激な法律が施行された日本です。図書館員は図書館の自由を守るため、武装した図書隊員として、メディア特務機関と対立する事態となっていました。主人公の笠原郁はかつて自分が買おうと

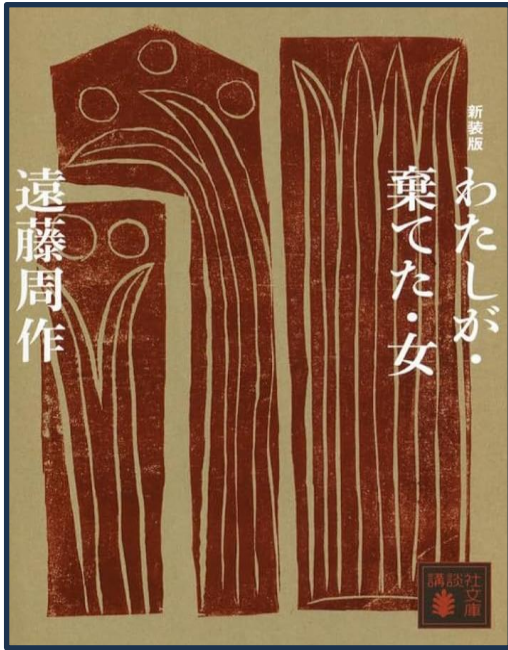
していた本が検閲で販売禁止となった際、本を取り戻して助けてくれた図書隊員の堂上篤に会うため図書隊員になります。

笠原が車いすの要人を守るため共に誘拐された場面では、一歩間違えれば人質が殺される状況にもかかわらず、図書隊員が協力して助け出すところはハラハラドキドキしました。また笠原と上官である堂上の関係性の変化も注目ポイントです。

私はこの本を読んで、図書館はどのように運営されているのか、図書館で働くにはどうしたらよいのかなど、図書館へ興味を持つきっかけになりました。（平井）

『わたしが・棄てた・女』

遠藤 周作／著（講談社）



「主人公の吉岡努に棄てられた女、ミツが残した言葉に号泣してしまった」そう言って、先生が仏教学の授業で学生の私達に紹介してくれたのが本書です。

この物語の舞台は戦後の東京。大学生の吉岡は、万年床で埃だらけの部屋に下宿していました。ある日、雑誌の映画

投稿欄に寄せられた若い女性ミツの拙い文章が目に入り、彼女なら騙せるだろうと、手紙を送ったことがきっかけで、二人は知り合い、ミツは吉岡のことが好きになってしまいます。

ミツは小さな幸せを無邪気に喜び、吉岡のために稼いだお金ですらも生活に困っている親子を見ると手渡し、また友人の代わりに罪を被るような心が純粹で不器用な女性でした。そんな彼女と彼女にふりかかる過酷な運命と世の中の不条理さが強烈な印象を残し、私は一段深く、文学の世界にはまってしまいました。

（伊藤） ※著者の没後25年に発見された「戯曲 わたしが・棄てた・女」『善人たち』に収録（新潮社）では、50歳の吉岡が登場します。併せて読んでみてください。

『いつの空にも星が出ていた』

佐藤 多佳子／著（講談社）



私が本書を手にとったのは、表紙のデザインとタイトルの雰囲気惹かれたことがきっかけでした。当時の私は野球にあまり興味がなかったのですが、読み始めてすぐ、この物語に引き込まれました。

大洋ホエールズから、優勝したのち苦しい低迷期を迎える横浜ベイスターズ、そして、明るく強いチームに変わってきた今の横浜DeNAベイスターズ。本書は、そんなベイスターズをそれぞれの世代で応援するファンたちのお話です。

著者自身が筋金入りのベイスターズファンということもあり、それぞれのファンの心情がリアルに伝わってきます。チームが弱くても、強くても、ただただ勝利を願って声援を送る彼らの姿にこちらの胸も熱くなりました。野球に限らず、何かに全力で夢中になることがどれほど幸せなことかを感じさせてくれます。

（小島）

司書オススメ図書

あんない

vol.5

今号のテーマ

あなたの人生を変える1冊



2025年11月発行

近江八幡市立図書館

『ナイフ』

重松 清／著（新潮社）



本書は、平凡な家族の日常を「ナイフ」のように鋭く切り取った5編の短編集です。

そのうち4編では「いじめ」が起こります。無視される女子中学生、息子のためにナイフをしのばせる父親、親の理想に苦しむ子どもなど、そこ

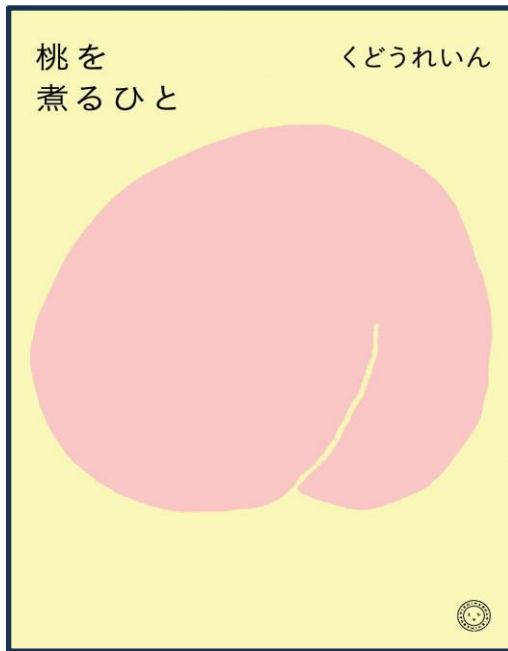
には辛く苦しい現実があり、その描写は思わず目を背けたくなるほどです。しかし、彼らはどうしようもない感情を抱えながら、それでも必死に生きています。

作者の本は昔から読んでいますが、私自身の言葉にならない感情を^{すく}掘り上げられるような細かい描写がいつも心に深く残ります。

本書が刊行されたのは25年前ですが、生きること、そして相手と向き合うこと、その重みは変わることなく、今の私達にもずっしりと響いてくるのではないのでしょうか。（萩山）

『桃を煮るひと』

くどう れいん／著(ミシマ社)



大人になれば余裕をもって生活が送れると思っていました。でも、そんなにうまくはいきません。疲れて帰ったら、とりあえず食べられるものをおなかにいれて寝てしまう日もあります。そんな自分がいやだなと思っていたときにこの本に出会いました。

この本は食べることを大切にしている作家くどうれいんさんの食に関するエッセイ集です。

夜ご飯に海老カツを作るために、はんぺんを探すけどみつからない日。やっとみつけたはんぺんを抱きしめたくなったり、海老カツの準備をしているとパン粉がないことに気が付き、台所に座りこんで絶望したり。うまくいかない海老カツ作りでも、どこかわくわくしているくどうさんの文章を読むと、ときどきは、夜ごはんをちゃんと作ってみようという気持ちになります。(田中)

★あなたの人生を変える一冊★

『アウシュヴィッツの図書係』

アントニオ・G・イトウルベ／著・小原 京子／訳
(集英社)



第二次世界大戦中、教育も読書も固く禁じられていたアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所のなかで密かに学校が作られ、そこにはわずか8冊だけの図書館がありました。

14歳のユダヤ人の少女ディタは、図書係に任命され、先生達の授業のため

に本を貸し出し、一日の終わりに本を秘密の場所に隠すという命がけの使命を託されています。死と隣り合わせの状況下でディタや子ども達は「本を開けることは汽車に乗ってバケーションに出かけるようなもの」と先生が語る物語にわくわくします。

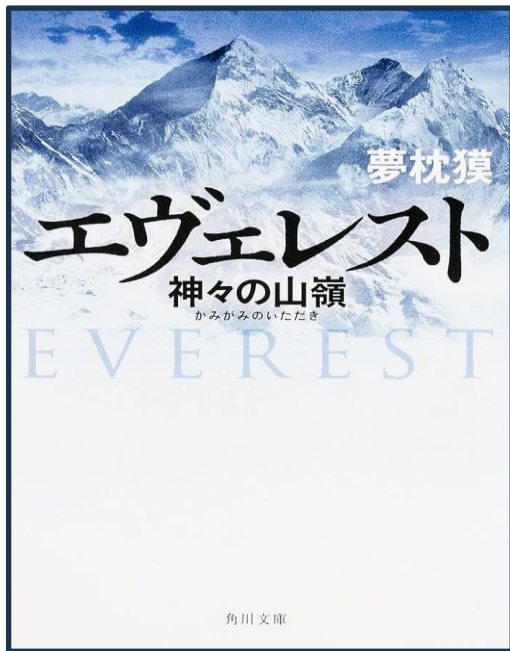
本書は実話です。絶望的な日々のなかでも、子ども達に未来を託し、命がけで勉強を教える大人達。教育とは明日への希望であり、読書とは生きる力だと実感させられます。(奥村恭代)

★あなたの人生を変える一冊★

『エヴェレスト 神々の山嶺』

いただき

夢枕 獯／著 (KADOKAWA)



1924年、エヴェレスト初登頂に挑み、下山途中で命を落としたジョージ・マロリー。彼の登頂の成否を解くカギは、彼が携帯していたカメラに記録されているかもしれない。自らもエヴェレストに挑戦したことのあるカメラマン深町はそう考えて、そのカメラを手に入

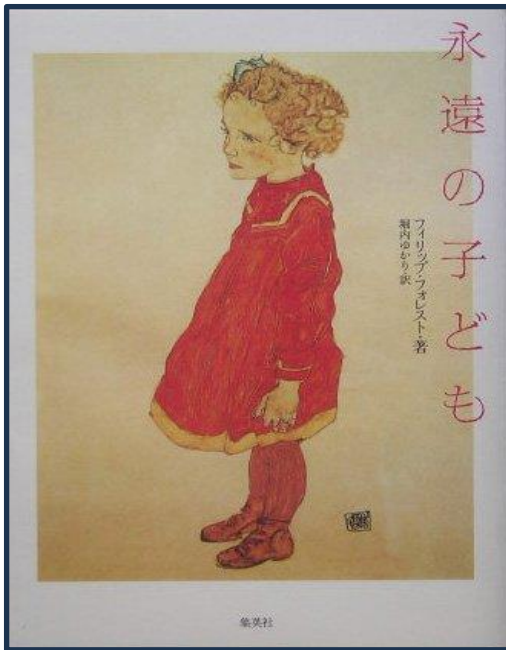
れますが、盗まれてしまいました。カメラを追ううち、深町は伝説の登攀者羽生丈二の行方を追うことになります。羽生は、前人未到の単独でのエヴェレスト冬季南西壁無酸素登頂を計画し、深町も再びエヴェレストを目指します。

想像を絶する過酷な状況で、無謀ともいえる登攀を続ける羽生の壮絶な過去と生き様に、なぜか惹かれてしまいます。登山家たちは、なぜそこまでして頂を目指すのか。彼らの山に対する思いもリアルに描かれていて、若い時に読んでいたら、登山に目覚めていたかもしれない一冊です。(泉野)

★あなたの人生を変える一冊★

『永遠の子ども』

フィリップ・フォレスト／著・堀内 ゆかり／訳
(集英社)



本書は、3歳の愛娘をがんで失うまでの1年間を、父親の視点から描いた私小説です。文学の大学教授である著者は、娘の腕の痛みの原因が腫瘍だと告げられてから、近い将来娘が死んでしまう、という逃れられない運命に絶望します。

そんな著者が、なんとか精神を正常に保つことができたのは、娘と二人で過ごした思い出や、これまで著者が繰り返し読み、影響を受けてきた文学の存在でした。

娘の発病からその心臓が止まるまでの一瞬一瞬が冷静に描かれ、それがかえって悲しみの深さを感じさせ、読んでいて胸をえぐられるほどの思いをしました。その一方で、言葉や文学がそれを乗り越える力となる、と勇気をもらいました。「魂のこもった文学」とはこの本のことだ、と何度読んでも実感できる、私にとって大切な本です。(世古)

『風は西から』

村山 由佳／著(幻冬舎)



この作品は、一見すると恋愛小説のように始まりますが、実際には「過労死」といった社会問題を描いた社会派小説です。主人公の青年が過酷な労働環境に追い込まれ、命を落としてしまうところから物語は展開し、残された恋人や家族が真実を求

めて企業と闘う姿が描かれます。

現実起きた事件をモデルにしているためリアリティがあり、昨今の社会問題である「過労死」の現実を登場人物の視点を通して深く理解できるようになっています。特に、限界まで頑張っている人に対して“頑張って”という言葉が、時に追い詰めるものになってしまうという気づきは強く心に残りました。重たいテーマですが、働くことの意味や人を大切にすることについて深く考えさせられ、自分の仕事観、生き方を見つめ直すきっかけとなります。(小西)

★あなたの人生を変える一冊★

『チャリング・クロス街84番地』

ヘレーン・ハンフ／編著・江藤 淳／訳

（中央公論新社）



1949年、ニューヨークに住む著者がロンドンの古書店に一通の手紙を送ります。そこから始まる、著者と古書店に勤務するドエル氏との20年に亘る交流を描いた往復書簡集です。

初めは顧客と書店員としてのやり

取りだった手紙が、次第に本に思い入れがある者同士の親しみが込められたものになり、望んでいた本が届いて喜ぶ著者の手紙は、読んでいて、こちらも嬉しくなります。そして、手紙を通しての交流はドエル氏だけでなく、ドエル氏の同僚や家族、隣人へと広がっていきます。著者のユーモア溢れる注文の手紙も、それに答えるドエル氏の誠実で丁寧な返事も、綴られる手紙のすべてに、本への愛情と相手に対する思いやりが感じられ、心の通い合ったコミュニケーションに読後は温かい気持ちになります。（荒川）

★あなたの人生を変える一冊★

『その本は』

又吉 直樹 ・ ヨシタケ シンスケ／著(ポプラ社)



絵本作家のヨシタケシンスケとお笑い芸人で芥川賞作家の又吉直樹による短編小説です。

ある国に本好きな王様がいました。今までにたくさんの本を読んだ王様ですが、もっと多くの本が知りたいと思い2人の男を城に呼び出しました。

そして、王様は2人に資金を与え、世界中を旅してめずらしい本を探してくるよう頼みました。1年後、2人はいろんな人から聞きたいいろんな本の話をも国に持ち帰り、一夜ごとに王様にその本の話をお聞かせしました。果たして2人はどんな本に出会ったのでしょうか。クスツと笑える話、少し感動する話など「その本は、」という一言から様々な本の話が始まります。本って面白いと思うきっかけになるかもしれません。(草野)

★あなたの人生を変える一冊★

『ベルギーパティシエの四季暮らし』

レゾンシエル／著 (KADOKAWA)



著者はベルギー在住のパティシエで、彼のことを知ったのはお菓子づくりのユーチューブでした。美しいケーキと丁寧な指導、すぐに私はお菓子作りの世界に引き込まれました。

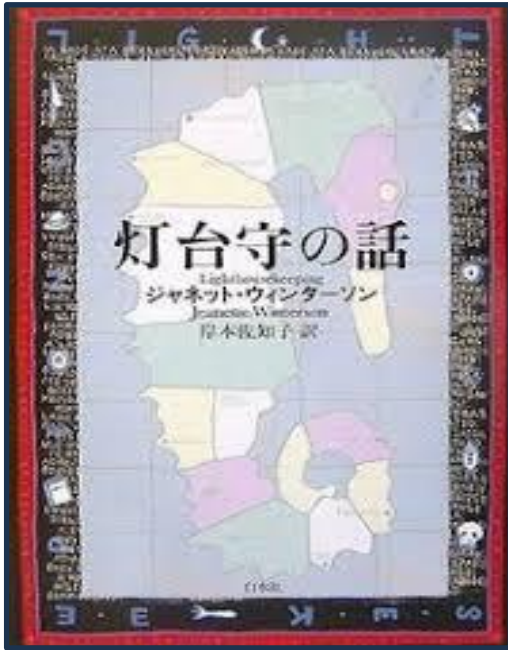
この本は著者のベルギーでの日々を写真とともに紹介したエッセイです。

桜に対する思いの違い、楽しみなバカンス、大聖堂のネロとパトラッシュ、お米のような袋に入ったチョコレート、クリスマスシーズンなどなど、長年住んでいても新しい発見に 感動し時には文化の違いに翻弄されることも、生活しているからこそ見えてくることがいきいきと綴られています。

憧れのパティシエのお菓子がこんなふつうの日々の中からうまれている。そのことが私のお菓子作りへの思いを「がんばる」から「たのしむ」へと変えてくれました。一歩前に進めた気がします。(轟)

『灯台守の話』

ジャネット・ウィンターソン／著・岸本 佐知子／訳
(白水社)



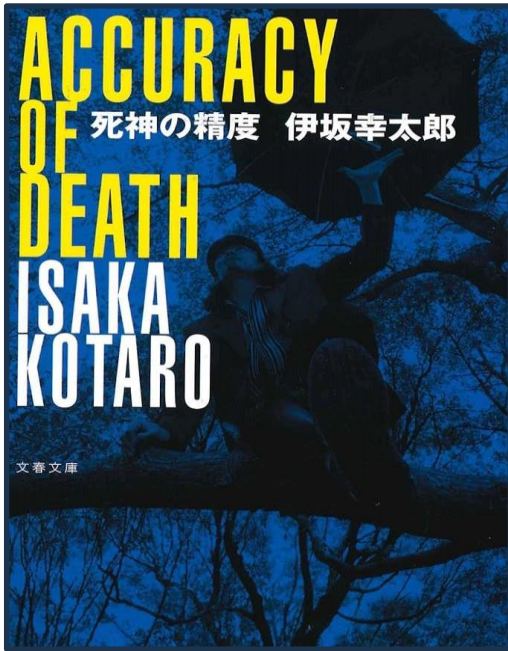
母親を亡くした少女シルバーは、年老いた盲目の灯台守ピューに引き取られ、灯台守見習いとなります。灯台守の大切な仕事とは、光を絶やさないことと、物語を語ることでした。ピューはこの灯台に関わる牧師の物語を、毎晩シルバーに語って聞かせるのでした。

孤独に思える日々でも、シルバーはいくつもの物語を聞くことで、愛や生きる上で大切な教えを知ります。そして灯台を出ることになった時には、自らの人生をも物語として語ることで自分を見つけ出しながら、己の人生を歩むようになります。

本書はシルバーと牧師、2人の人生を軸として、いくつもの物語が交互に語られます。複雑に重なり合う物語を通して、自分にとって大切なものを見つけだしていくシルバーの姿は、物語が心の救いや道標になるということを信じさせてくれます。(岩井)

『死神の精度』

伊坂 幸太郎／著(文藝春秋)



この本は死神・千葉を主人公とする短編集です。死神の仕事は調査対象となる人間と接触して、7日後に生死の判断を下すことでした。

千葉は人間の死に興味を持たない冷徹な死神ですが、その反面、音楽を偏愛するあまり、人間が死に絶えて音楽が失われるのがつらいと考えるような一面も持ち合わせています。千葉に調査される人々の大半は、自分が死ぬ運命と気づきませんが、中には自らの死を望み、運命を受け入れる人もいました。結末が「死」と決まっていますが、彼らは皆、自分自身の人生と向き合い、それぞれの最期の時を迎えるのです。

誰も彼も運命を知らずに辿り着く、人生最後の日。いつか来るその日まで、自分らしく生きてみようと思議と前向きな気持ちになる作品です。(吉村)